

中国語における使役と受身の表現について

小林 立

序

“中国語は本来的に能動・被動を意識しないことばなのである”(1)といわれる。だが“能動・被動を意識しない”とは、どういう意味なのであろうか。“能動・被動”という意識が成り立つには、そこに少なくとも二つの事物(人を含む)があって、両者の相互関係が認められる必要がある。二つの事物の相互関係に文中における役割りを与えると、一つは主語、もう一つは賓語という名称で表せるだろう。中国語では主語と賓語の相互関係を表現する文型としては、四種類の表現が想定できる。

- ① 主語+謂語：主動の表現と被動の表現の両方の表現ができる。
- ② 主語+謂語+賓語：能動(使役を含む)と被動の両方の表現ができる。
- ③ 主語+謂語₁+賓語+謂語₂：これは兼語式と称される文型で、使役の表現ができる。
- ④ 主語+介詞+賓語+謂語：使役と被動の両方の表現ができる。

一般に、使役と受身の表現は対極的な文型で以て表現されると考えられるが、中国語においては同じ文型で使役と受身が表現できる場合がある。“能動・被動”という言葉の意味を、使役と受身という狭い意味で把えても、中国語では、上掲のように②と④は、全く同じ文型で以て使役と受身の表現ができると言える。文型が全く同じであるとすれば、その区別は語彙的意義の差異と文脈によるしかないことになる。このように使役と受身について文型において区別がなく、同じ文型で表現されることから、使役と受身を“意識しないことば”であると言われるのかもしれない。

一 使役の表現

中国語の使役の表現には、前掲の四つの文型のうち②③④の三つがある。

②主語＋謂語＋賓語：この文型では謂語に使役他動詞を用いる。“…させる”という意味の他動詞であるが、これには形容詞からの転用が多く見られる。現代中国語では二音節の形容詞が多く用いられる。謂語は賓語のあるべき状態・動作を表現している。

富国強兵。（国を富ませ、兵を強くする）

飲馬。（馬に水を飲ませる）

端正態度。（態度を正しくする）

③主語＋謂語₁＋賓語＋謂語₂：この文型の表現は、賓語は謂語₁に促されて謂語₂の動作・行為をさせられるものである。言いかえると謂語₁は“原因”であり、謂語₂は“結果”である。(2) 賓語は謂語₁によって謂語₂の動作を“やらされる”という関係にある。

他₁派人₂送東西。

（彼は人を派遣して品物を届けさせた）

他強迫₁飛機₂更改航綫。

（彼は飛行機を強迫して航路を変更させた）

这句话引人大笑₂。

（この言葉は人々を大笑いさせた）

謂語₁の他動詞は賓語への働きかけは具体的である。その働きかけを媒介して賓語のやるべき動作・行為が引き出される。従って、この文型は②主語＋謂語＋賓語の文型と比較すれば、その表現力はより豊かになっている。

④主語＋介詞＋賓語＋謂語：この文型は、③の主語＋謂語₁＋賓語＋謂語₂の文型における謂語₁が虚詞化して介詞となった表現と考えられる。介詞には“叫(教)”“讓”“給”“使”などが用いられるが、これらは本来は動詞であり、その動詞としての意味の残像を伴っているため、介詞に転化して用いる場合にも原義に沿った用法の差がみられる。(3)

同じく他動詞でありながら、“叫”“讓”などは介詞となり、“派”“選”などは動詞のまま留まって兼語式を形成している理由は何なのか。“派”“選”

などの動詞は意味が具体的で個性性が強い。それに比べると“叫”“讓”などは一般的性格をもち、より抽象的であるからであろう。賓語への働きかけは具体的ではないが、それだけ広範に賓語へ働きかける機能をにないうからに違いない。

従って、その動詞のもつ語彙の意味が一般的か、それともより個別的吗といった点が一方を動詞に留め、他方を介詞にまで転化させた原因であろう。使役の表現にみる三つの文型はまた中国語がその表現力の幅を増してゆく過程を示すものであると考えられる。

二 受身の表現

中国語の受身の表現には、前掲の四つの文型のうち、① ② ④の三つの文型があると言えるだろう。

①主語＋謂語：主語は文の意味から考えて受身に訳すことができるが、主語を主題とすることで受身に訳さなくてもよい。

小偷ル抓住了。

(こそ泥がつかまった)

(こそ泥はつかまった)

(こそ泥はつかまえた)

北京解放了。

(北京が解放された)

(北京は解放された)

(北京は解放した)

②主語＋謂語＋賓語：謂語に用いられる動詞は語彙の意味が受身のものに限られる。“受”“挨(される)”“蒙”“被”“遭”，等。

受压迫受剥削。

(压迫され搾取される)

受到欢迎。

(歓迎される)

孩子挨打。

(子どもがなぐられた)

他挨批評了一次。

(彼は一度批判された)

被災。

(災害を被る)

④主語＋介詞＋賓語＋謂語：介詞には“叫”“讓”“給”“被”などが用いられる。しかし、この文型は、“被”を除くと、“叫”“讓”“給”の文は使役にも受身にも訳すことができる。

我叫他打了。

(私は彼になぐらせた)

(私は彼になぐられた)

我被他打了。

(私は彼になぐられた)

“被”には被害を蒙るという意味が伴うが、現在では必ずしも被害者意識を伴わない拡張された表現もみられる。しかし無制限にそのような表現がされるわけではない。

困難被我們克服了。

(困難は我々によって克服された)

“被”を用いないでも表現できる。

困難克服了。

(困難が克服された)

(困難は克服された)

(困難は克服した)

三 介詞による使役と受身の表現

以上、中国語の使役と受身の表現には、各々三つの文型があると言ってよいことを見て来た。このうち使役と受身の文型が重なるのが②と④による表現である。②の文型においては、謂語に使役動詞を用いるか、それとも受身の意味の動詞を用いるかによって、使役と受身の区別はできる。しかし④の文型においては同じ介詞が使役の表現にも受身の表現にも用いられるという現象が見られる。この事態はどう理解したらよいのだろうか。

我叫他打了。

(私は彼になぐらせた)

(私は彼になぐられた)

我讓他去了。

(私は彼に行かせた)

(私は彼に去られた)

我的書讓人拿走了。

(私の本は人にもって行かせた)

(私の本は人にもって行かれた)

他給人打了。

(彼は人になぐらせた)

(彼は人になぐられた)

他的手表給弄坏了。

(彼の腕時計はこわさせた)(×)

(彼の腕時計はこわされた)

以上のように同じ介詞が使役と受身の両方に用いられるため、日本語に翻訳する場合には、使役と受身の表現に訳し分ける必要がある。その場合、使役に訳すべきか受身に訳すべきかは前後の文脈によって判別できるに違いない。また謂語が表現している動作・行為がその文の主語に向かうものであるかどうかによって使役と受身に訳し分ける手掛りとすることができるはずである。すなわち謂語の動作・行為が主語に向かうものであれば受身に訳し、主語に向かうものでなければ使役に訳すことになる。しかし、中国語の表現としては動作・行為の対象が主語であるのかそれとも他の事物に向かうのかは、文型としては何の差もない。日本語に翻訳する場合に使役と受身の区別を明確に表現することが要求されるだけである。それは中国語を“日本語のように、使役の助動詞「せる、させる」と受身を表わす助動詞「れる、られる」によって、使役と受身とが文法形式として異なっている言語に「訳す」時に問題になるのであって、中国語自身としては、(中略)本質的な意味には変わりのないことであろう。”(4)からである。

④の介詞構造の表現には、また呼応形式もみられる。“叫～給～”，“讓～給～”，“被～給～”，“給～給～”など。この“給”には本来「与える」という意味があり、日本語の訳としてはそれが使役にせよ受身にせよ，“給”が呼応形式の表現に現われることは、やはり文全体としては積極的に動作・行為を「与える」ものとして把握されていると考えてよいだろう。呼応形式にみられる“給”は介詞構造の謂語の動作・行為が誰に与えられるかは別にして，“給”を用いることで文章には能動的な意味しかないことを更にはっきりと表明するものであると言えるだろう。

四 使役と受身の互換

中国語では使役から受身へ、受身から使役へ転換することができる。しかし意味に変化が生まれるため、単純に互換できない場合も見られる。

先ず、使役から受身への転換について：

- | | |
|---|------------------------|
| { | 主人讓我进屋子里去。 |
| | （主人は私を部屋に通した） |
| { | 我被主人进屋子里去。 |
| | （私は主人に部屋に通された） |
| { | 这件事使我很高興。 |
| | （このことは私をたいへんよろこばせた） |
| { | 我被这件事很高興。 |
| | （私はこのことによりたいへんよろこばされた） |

次に、受身から使役への転換について：

- | | |
|---|--------------------|
| { | 我被他这句话深深感動了。 |
| | （私は彼のこの言葉に深く感動した） |
| { | 他这句话使我很深深感動了。 |
| | （彼のこの言葉は私を深く感動させた） |

ところが次の二例は、転換できない。

- { 皮包讓一个学生拾得了。
 (カバンは一人の学生によって拾得された)
 { 一个学生使皮包拾得了。(×)
 (一人の学生がカバンをして拾得させた)

- { 这情况被一个姑娘看见了。
 (この状況を一人の娘に見られた)
 { 一个姑娘使这情况看见了。(×)
 (一人の娘がこの状況をして見させた)

上の二例は受身から使役に転換できないが、もし転換しようとするれば、“処置式”の表現に転換するしかないだろう。“処置式”は介詞構造の一種であるが、介詞“把”を用いて賓語を謂語の前におき、賓語に処置・変化を加える表現である。処置式文の謂語は能動的な動詞であるのが普通である。しかし、場合によっては看見(見る, 見かける)といった知覚動詞が用いられることもある。これは賓語が特別の意味をもつと意識される場合だからであろう。

- { 一个学生使皮包拾得了。(×)
 { 一个学生把皮包拾得了。
 (一人の学生がカバンを拾得した)

- { 一个姑娘使这情况看见了。(×)
 { 一个姑娘把这情况看见了。
 (一人の娘がこの状況を見かけた)

従って、使役から受身へは転換できるが、受身から使役には転換できない例があることがわかる。何故、そのような差が生れるのだろうか。

介詞を用いた使役の表現は四種類あり得るが、人と人、物と人、の二種類の関係には使役が成り立ち、これらは受身にも転換することができる。しかし、人と物、物と物、の関係においては、一般に使役の表現そのものが成立しにくいと言える。それらの関係は使役の表現としてよりは同じく介詞の表現であるが処置式を用いて表現されると言うてよいだろう。

- { (使)人₁ + 介詞 + 人₂ + 謂語
↓
(受)人₂ + 介詞 + 人₁ + 謂語
- { (使)物 + 介詞 + 人 + 謂語
↓
(受)人 + 介詞 + 物 + 謂語
- { (使)人 + 介詞 + 物 + 謂語(×)
↓
(処)人 + 介詞(把) + 物 + 謂語
- { (使)物 + 介詞 + 物 + 謂語(×)
↓
(処)物 + 介詞(把) + 物 + 謂語

使役の表現は賓語そのものが謂語の主体であり得ることを要求されるために、物が賓語の位置に来る場合は、使役ではなく処置の対象となる方が自然だからであろう。

他方、介詞を用いた受身の表現にも四種類あり得るが、人と人、人と物、物と人、物と物、の四つの関係は全て成り立つと言える。しかし、そのうち使役の表現に転換できるのは二種類と言えるだろう。

- { (受)人₁ + 介詞 + 人₂ + 謂語
↓
(使)人₂ + 介詞 + 人₁ + 謂語
- { (受)人 + 介詞 + 物 + 謂語
↓
(使)物 + 介詞 + 人 + 謂語
- { (受)物 + 介詞 + 人 + 謂語
↓
(使)人 + 介詞 + 物 + 謂語(×)
- { (受)物₁ + 介詞 + 物₂ + 謂語
↓
(使)物₂ + 介詞 + 物₁ + 謂語(×)

受身の表現は成立するが、使役の表現には転換できない場合についてみると、これまた介詞(把)を用いて処置式にすれば文章を成すことができると言ってよいだろう。従って、使役と受身の互換が成立しない場合には、いずれも処置式との間で転換がみられると言えそうである。

結 語

中国語における使役と受身の表現は各々三種の文型で表されるが、問題は介詞構造の表現が使役にも受身にも用いられることにある。すなわち、介詞の“被”を除くと“叫”，“讓”，“給”などは使役の表現にも受身の表現にも用いられる。一見、両用されているように思われるが、中国語の表現としては使役の表現であると言ってよいのではないか。中国語では、介詞の“叫”“讓”“給”はいずれも“～させる”という能動的な意味で用いられているのであるが、日本語は使役と受身を異なった文法形式として表現するので、日本語に翻訳する場合には使役の表現と受身の表現に訳し分ける必要が生れる。その分岐点は謂語で表現される動作・行為が主語に戻って来るか否かにあり、それによって日本語としては使役または受身に翻訳せざるを得ないことになる。中国語では使役の表現の謂語が主語に戻って来るか否かに関係なく、同じ介詞を用いて使役の表現をしているに過ぎないのである。使役の介詞表現は“被”を除くと本来的には使役の表現であり、その同じ文型の表現が日本語に訳す時点で受身に訳す必要が生れる場合もあるわけである。従って、日本語に訳された受身の表現には日本語の文法形式が投影されたものが含まれていることになる。

中国語のいわゆる受身の表現は本来は不如意を示す表現である。従ってよく用いられる動詞は、本来的に受身の語彙的意味をもつ動詞である。“挨”“遭”“受”“蒙”“被”など。“受”と“蒙”は好悪両方に用いられるが、大体、不利益な場合の表現が多いようである。

従って、中国語の使役と受身の表現は文型として対極的に捉える発想ではなく、基本的には単語の語彙的意味によって表現されると言ってよさそうである。

“中国語は本来的に能動・被動を意識しないことばなのである”と言われるのは、そのような意味ではないのだろうか。

引用・参考文献

- (1) 香坂順一著『中国語学の基礎知識』 284頁, 光生館, 昭和46年11月.
- (2) 松村文芳 “やさしい作文・兼語式動詞文”『中国語』 1984.3, No.290 大修館書店.

- (3) 藤堂明保著『中国語概論』 83頁 大修館書店 1979年5月.
(4) 原田寿美子 “何が兼語式を構成するか”『中国語』 1982.6, No.269,
大修館書店.

大原信一, 伊地智善継著 『中国語表現文型』 江南書院, 1956年3月.
伊地智善継, 香坂順一, 大原信一, 太田辰夫, 鳥居久靖共編 『新しい中国語
教本・文法作文篇』 東京光生館 昭和35年5月.

望月八十吉, 高維先共著 『中国語学習のポイント』 110頁~115頁 光生館
昭和45年10月.

大河内康憲 “受動文”『中国語』 1979.3, No.230, 大修館書店.

大河内康憲 “被”『中国語』 1983.3, No.278, 大修館書店.

長谷川良一 “使役, 受身と場景の描写”『中国語』 1983.3, No.278, 大修
館書店.

大河内康憲 “中国語の受身”講座日本語学10 明治書院 昭和57年6月.